

道南太平洋海域スケトウダラニュース

平成 23 年度 第 2 号 2011 年 12 月 12 日

北海道立総合研究機構 栽培水産試験場 調査研究部
TEL : 0143-22-2327 FAX : 0143-22-7605

道南太平洋スケトウダラ資源調査（計量魚探調査）結果

函館水試調査船「金星丸」により行われたスケトウダラ資源調査の結果をお知らせします。

- ・ 調査期間：平成 23 年 11 月 25～30 日
- ・ 調査海域：道南太平洋の水深 100～500m の海域

- ・ スケトウダラの調査海域の平均反応量は、前年度を下回った。
- ・ 魚群反応は胆振沖（登別から白老沖）が中心。
- ・ 反応の比較的強い水深は 300m 前後であったが、250m 以深の反応は海底からやや浮いた反応。また、胆振沖では水深 100m 付近にも強い魚群反応がみられた。
- ・ 漁獲物の体長（尾叉長）は、登別沖の水深約 200m で漁獲されたスケトウダラでは 40cm 台前半の成魚が主体であったが、水深約 300m では 20cm 前後の未成魚が主体であった。また、砂原沖の水深 300m 付近でも 20cm 前後の未成魚が主体となっていた。

1. スケトウダラとみられる魚群は、渡島から日高海域にかけて広い範囲で観察されました。その中でも、胆振海域の 182、183、185 海区および渡島海域の 197、203 海区に強い反応がみられました。（図 1， 2）。
2. 調査海域（おおよそ水深 100～500m）の平均反応量は、前年同期を下回りました（図 3）。しかし、昨年度及び今年度は、とくに胆振沖（室蘭～苫小牧沖）で調査海域よりも沿岸に設置されている定置網にスケトウダラ成魚がまとまって入網していることから、この 2 年間は調査海域外に分布するスケトウダラも多いと推定されます。
3. 魚群反応は、水深 100m～450m の範囲に観察されました。とくに水深 300m 付近に強い反応がみられましたが、250m 以深の反応は海底からやや浮いた状態となっていました（図 2， 4）なお、海底に着いた反応では、胆振沖の水深 100～250m に強い反応がみられましたが、渡島沖には、水深 200～250m 付近にややみられる程度で、200m 以浅にはスケトウダラの魚群反応はあまりみられませんでした（図 2）。
4. トロール調査の結果から、水深 200m 付近の反応はスケトウダラ成魚（尾叉長 40～45cm）と未成魚（尾叉長 20cm 及び 30cm 前後）、水深 300m 付近の反応はスケトウダラ未成魚（尾叉長 20cm 前後）主体と考えられます（図 5）。なお、平成 21 及び 22 年度のこの時期の調査と比べて、今年度は未成魚の比率がかなり高くなっていました。
5. 水温は水深 100m までは昨年度とほぼ同様な傾向となっていました。水深 100～200m では昨年度よりもやや低くなっており、平成 19 年度以降でも最も低い状況となっていました（図 6）。

なお、次の調査は年明け後の 1 月中旬（1/12～19）を予定しています。調査終了後にはまたスケトウダラニュースを発行して、分布状況等をお知らせします。

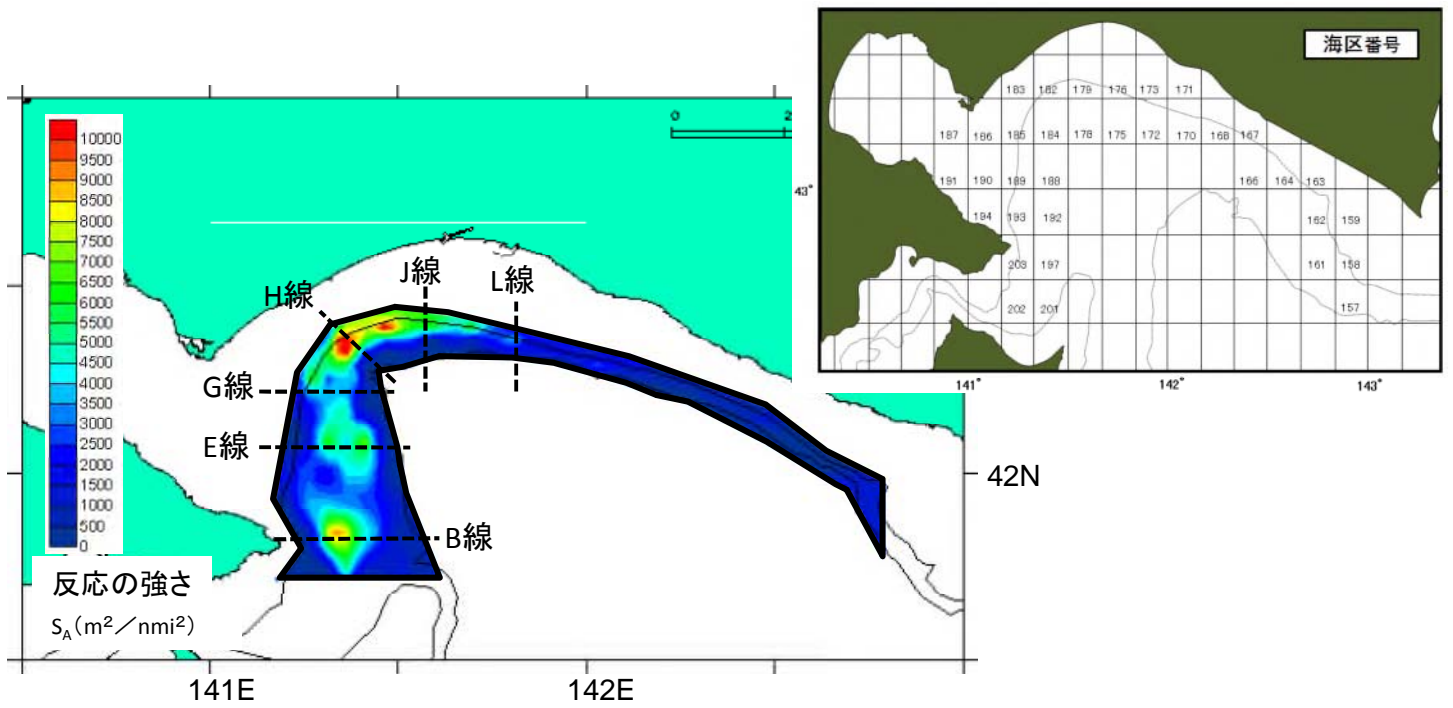


図1 調査海域における魚群の分布

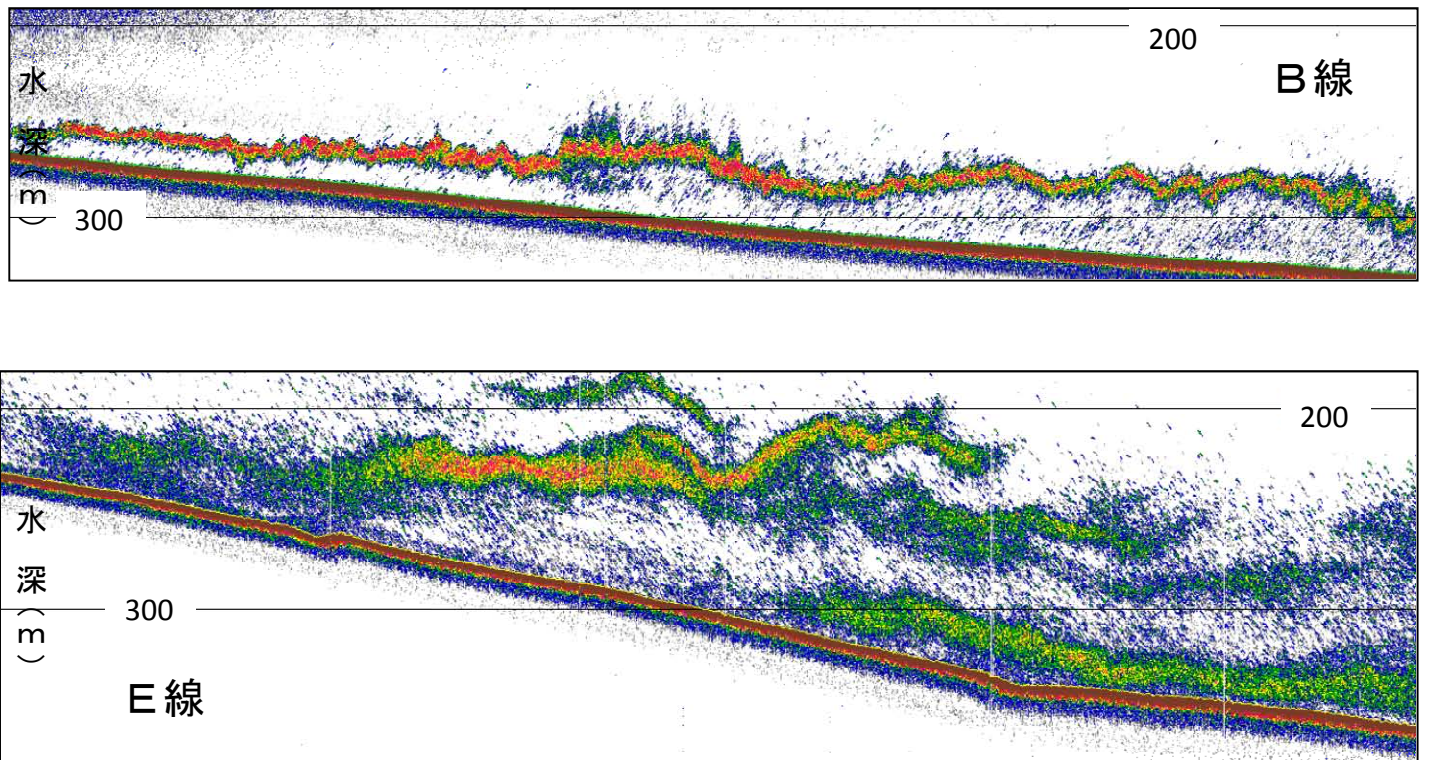


図2 魚群の分布状況(計量魚探画像)

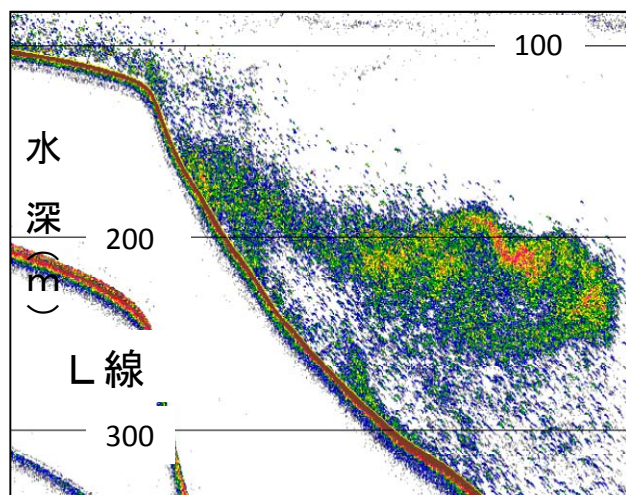
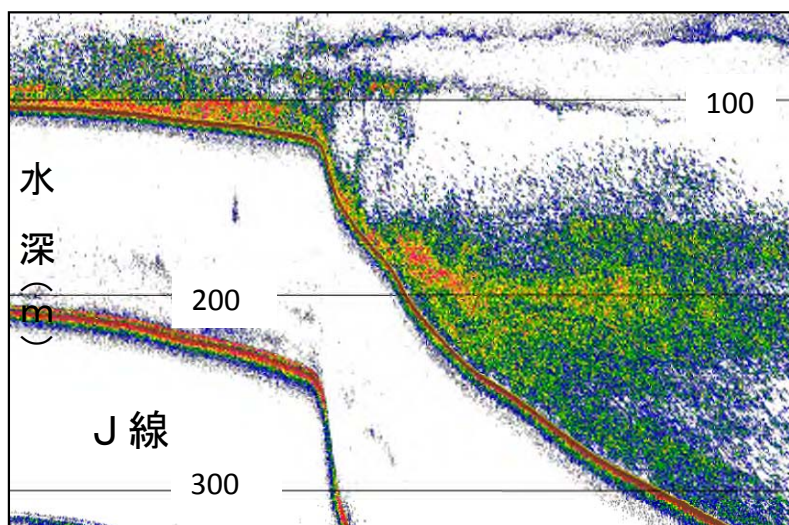
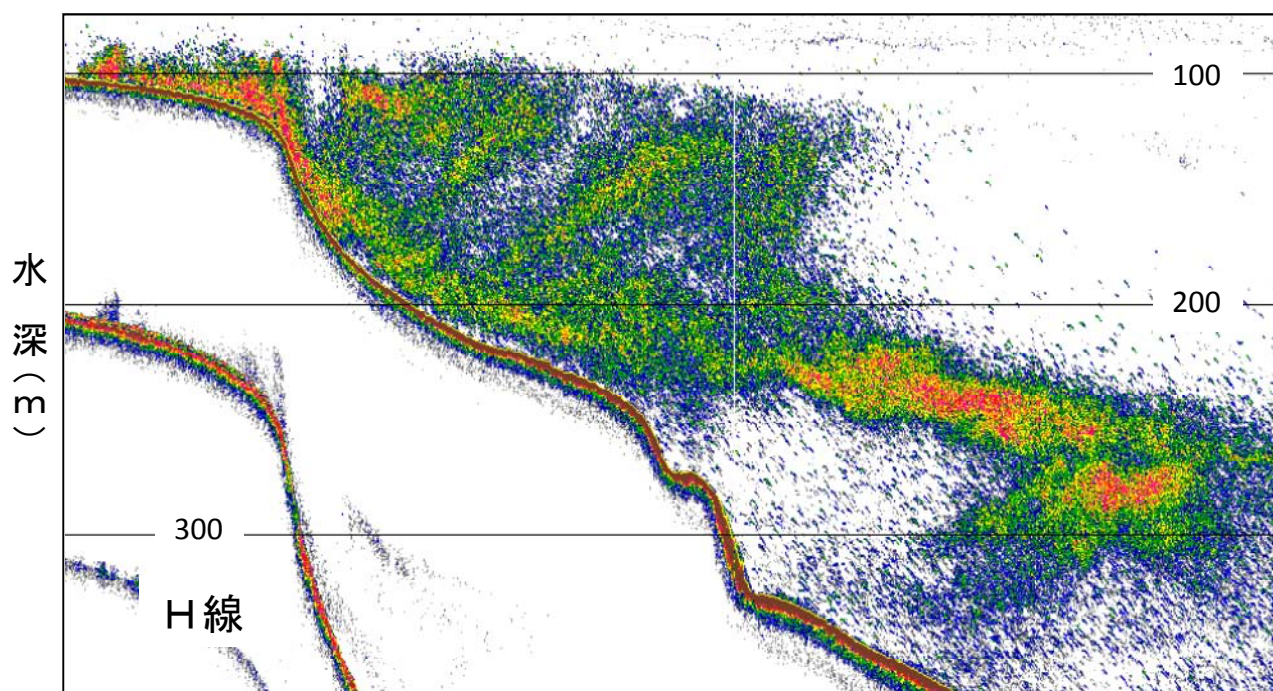
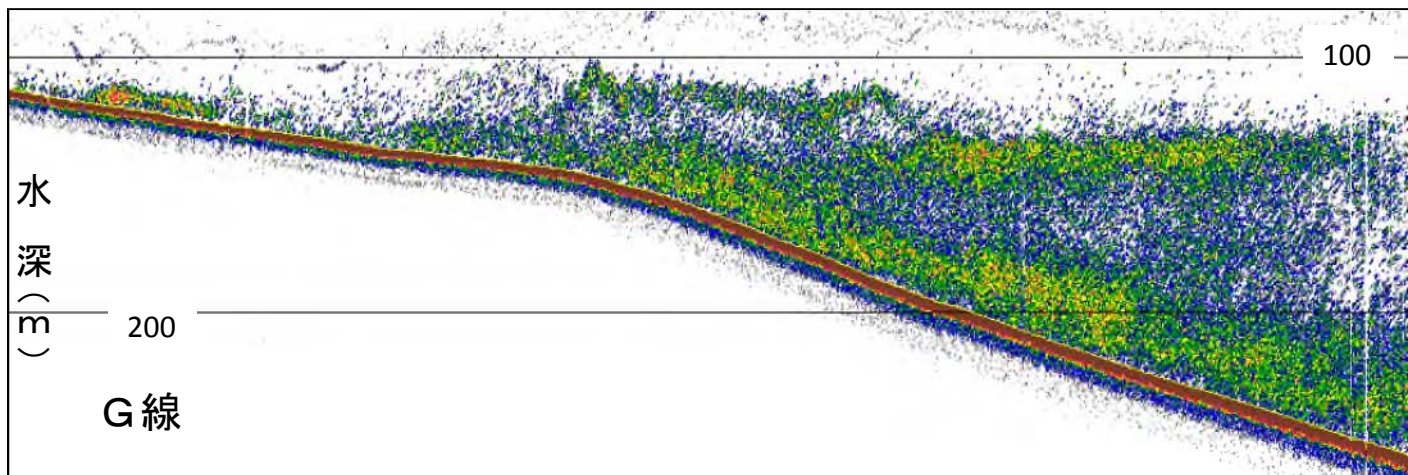


図2 魚群の分布状況(計量魚探画像)つづき

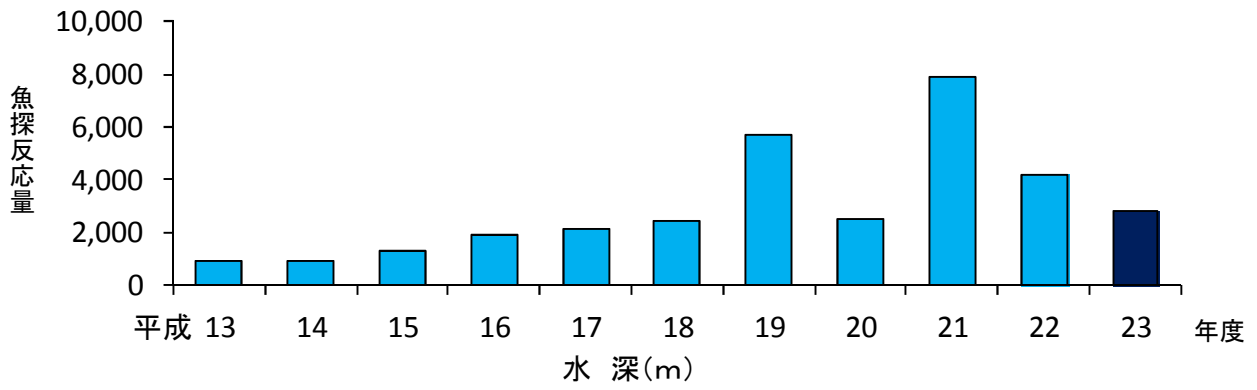


図3 海域平均の魚探反応量 (S_A) の推移

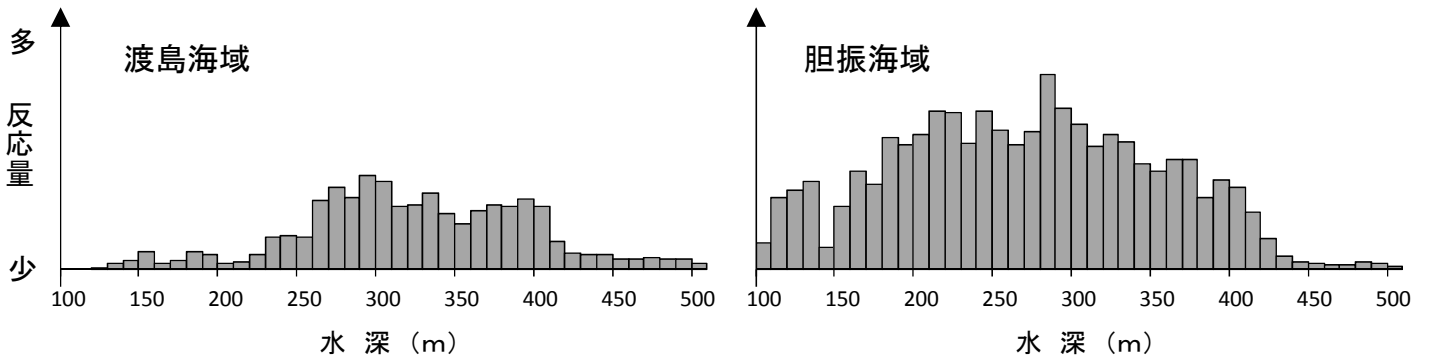


図4 水深別の魚探反応量

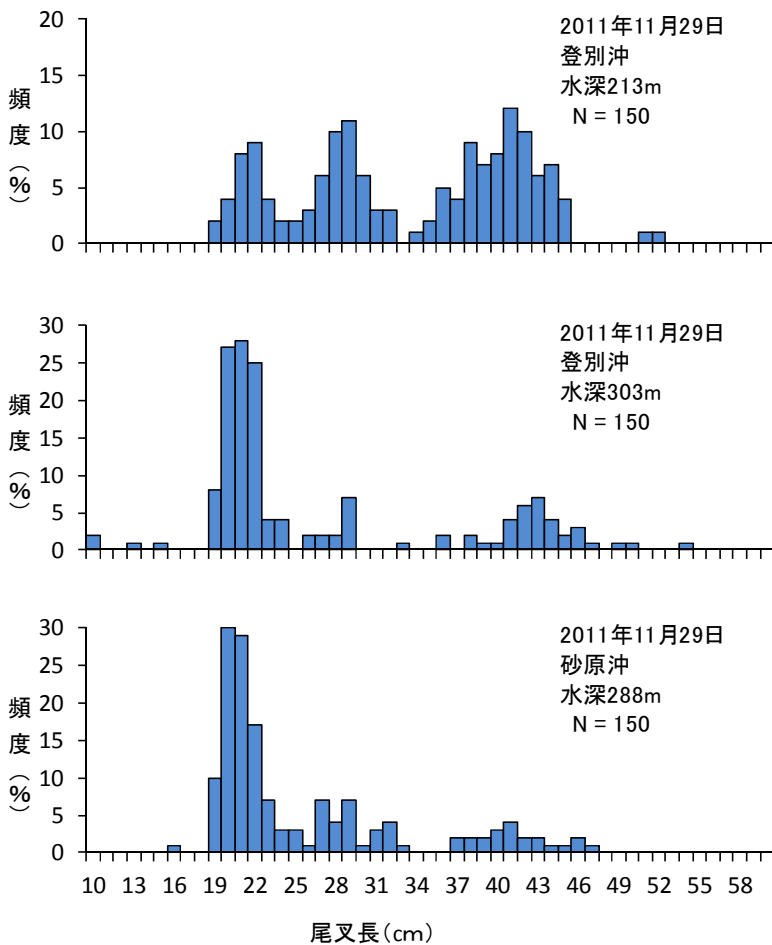


図5 漁獲物の体長組成

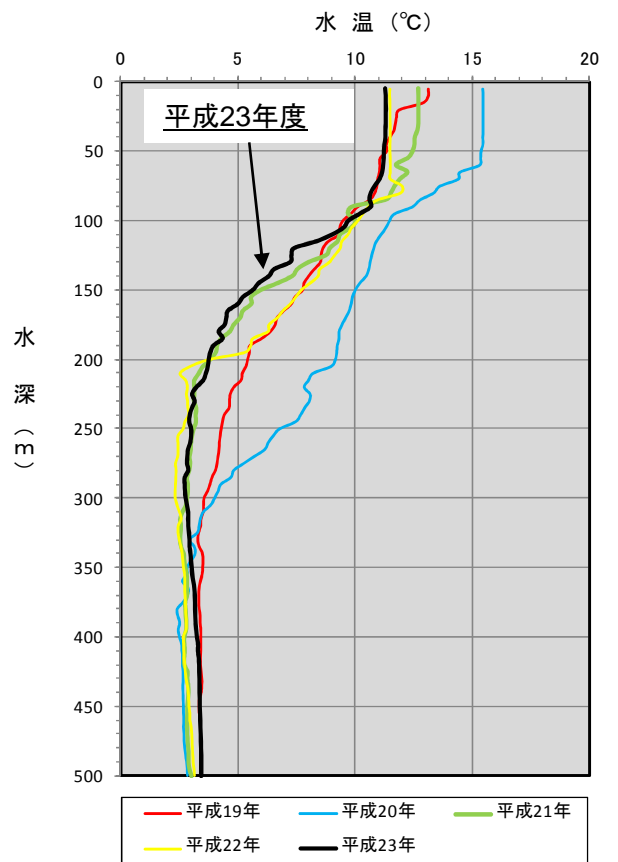


図6 水温の鉛直分布(登別沖)